

2003 ~
2025



Deep 小樽 写真・小樽を 発見する

2026/9/5 (sat)
~11/8 (sun)
9:30~17:00

休館日：毎週月曜日（9/21、
10/12 を除く）、9/24（木）
25（金）29（火）30（水）、
10/13（火）14（水）、11/4（水）



小樽写真研究会が向かう

「Deep 小樽」・・・とは？

神田 泰行

小樽は古い町並みが残っていて「ノスタルジック小樽」などと言われています。日銀小樽支店を除き、郵便局はいち早く立て直しましたが、そのほかは差し当たってのレベルの必要性と資金、展望なく、取り残されてきただけです。そしてここに至って観光小樽です。小樽運河完成100年のセレモニーが展開されました。市制施行100年の記念も大きく変わったところと、100年前からほとんど変わらない様に見えるところが入り混じって、今の小樽があります。かつてここ小樽は150年以上前の「オタルナイ」から始まり、明治以前より続く近代日本の北へ向かう最先端にいました。

小樽写真研究会は発足して37年。古くからのメンバーは30年を越えてこの街の目撃者であり、この会と写真に関わってきました。自分が体験したこと、諸々の事象に対して考え、反応してきたこと、それらによって立つ個人の基軸として、新たに今を生きる己の眼を通して、自分にとって、この街にとつての写真。ファインダーを覗きシャッターボタンの指にちからを入れる。そして数多くのショットの中から行為としての写真はどんな意味を持つのか。セレクト、プリント、レイアウトのプロセスを通して決定していく訳です。「Deep 小樽」の写真展は参加したメンバーの、小樽写真研究会の今の小樽の総体です。

Deepとは、「一見わかりやすいような言葉ですが、古い町並みを撮ればOKではなく、どれだけ深く街に、プリントの上に関わりを持てるか。それは己のDeepに向かう。Deepっていったい何なんだ。2003年にスタートしたこの企画は最終盤を迎えました。2019年市立小樽文学館企画展「Deep 小樽展・写真を読む」から7年、このことに向かった視線はこの街で撮影の行為を続ける上で確実にリンクしていくと思います。ご意見がありましたら是非伺わせてください。

神田 泰行

浅賀 志佐両氏と共に1989年、写真研究会創立者。

1985年夏、ジャズ喫茶「フリーランス」を設立。

この頃より、小樽の街と向き合った写真活動を始めて今日に至る。

2026年 9月5日(土) ▶ 11月8日(日)

- ・開館時間：9時30分～17時（最終入館16時30分）
- ・休館日：毎週月曜日（9/21、10/12を除く）
9/24（木）25（金）29（火）30（水）、10/13（火）14（水）、11/4（水）
- ・入館料：一般300（240）円 高校生・市内70歳以上150（120）円
障がい者・中学生以下無料 ＊（ ）内は20名以上の団体料金

同時開催：「小樽論・2」

場所：文学館無料展示スペース

2001年に開催された「小樽論・1」で展示した1,000枚の写真の一部を再構成し、あらたな風景論の一助とします。

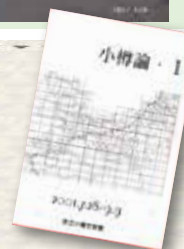


★「Deep 小樽 × 小樽論・2」

小樽写真研究会会員 × 玉川 薫

- 9月12日（土）14時～16時
- 会場：小樽文学館企画展示室
- 定員：30名
- 料金：入館料のみ（申込：9/1より1Fチケットカウンターまたは電話0134-32-2388）

＊イベント中でもご入館いただけます



公式ホームページ



公式 X

JR函館本線		小樽駅
●小樽経済センター		
●産業会館	長崎屋	●サンビルスクエア
都通リ		
●オーセントホテル小樽		
金融資料館 (旧日本銀行)		●市立小樽文学館
●郵便局本局		
●小樽芸術村		
小樽運河		

風景論 玉川 薫

先日、網走で映画「略称・連続射殺魔」が上映され、短い話を生きた。

1968年19歳のとき連続射殺事件を起こし、翌年逮捕された永山則夫がたどった各地の風景を映し続ける作品である。

永山則夫は網走市呼人に生まれた。母は幼い兄弟を厳寒の網走に置き去りにした。青森板柳に引き取られてからも極貧の生活で、兄らから日常的に暴力を受けた。

中学を出て各地を転々とするが仕事は長続きせず出奔窃盗を繰り返す。横須賀米軍基地で拳銃を盗み、東京、京都、北海道七飯町、名古屋で警備員、タクシードライバーを殺害した。映画は永山則夫の網走に映ったかも知れない風景を執拗に追いかける。背景にフリージャズが流れ、制作者の名も出ず映像は断ち切れたように終わる。1997年突然死刑執行された永山則夫の人生のよう

私は2001年夏に行った企画展「小樽論・1」を思い出した。小樽全図を等間隔で1000個のパーツ

に分割する。1箇所につき1枚の写真は撮影者の意識を反映させず撮ってもらう。その写真で壁面を埋めつくす。観覧者を戸惑わせた感想が目立った。「これは小樽ではない」というものもあった。そんななかでただ一通、「無表情な『小樽』の群れ。とりつく島もない。ただ眺めているうちに1枚、確かに記憶にある景色があった。この辺りに住んだことがある。思いだしたとたんに廻りの写真がいつせいにうごめきだした。」

永山則夫が母から真冬の呼人に置き去りにされた日から、生活が奪われた。どこへ逃げても無表情の風景が眼に映るだけだった。ありえたかも知れない生活（生きる実感）に気づいたのは、すべてが遅すぎた連続射殺事件容疑者として東京拘置所に収容されてノートに書きはじめた膨大な漢字の書き取りと、その隙間からうめくような「詩」が現れてからである。

後に「無知の涙」と名づけられたそのノートが市立小樽文学館にある。その理由を語るために、網走まで行ったのだった。

＊2023年小樽写真研究会会報に寄稿（前市立小樽文学館長）

市立小樽文学館

〒047-0031

小樽市色内1-9-5 TEL.FAX. 0134-32-2388